

アクティブ・ラーニングに関する取組と課題（最終年度）

教頭 宮原義文

1 はじめに

令和元年度は、県のアクティブ・ラーニング（以下AL）研究指定校としての最終年度となる。これまで、「新しい入試制度を見据えた授業形態（いわゆるAL）等の研究」という本校の教育目標に基づき、全職員でALの実践研究に取り組んできた。

本稿では、まず、3年間をとおした実践研究の概要や実践状況を述べる。次に、能動的思考や論理的表現に導くための本校におけるAL指導の実際を報告する。さらに、3年間をとおした総括及び今後の課題をまとめ、結びとする。

2 過去2年間の取組

平成29年度（研究指定1年目）及び30年度（2年目）の主な研修内容は次のとおりであった。（詳細は29年度、30年度研究紀要を参照）。

(1) AL目標値の設定

当初面談において、管理職が「AL指数^{*1}」の目標値を確認。（平成30年度から実施）

(2) 「スクールタイマー」の設置

すべての普通教室（24教室）に「スクールタイマー」を設置。

(3) 高校総合学力調査（平成29年10月21日〔土〕、平成30年10月20日〔土〕）

1学年対象。国語、数学、英語、教科融合の4教科について、思考力・判断力・表現力の定着度を評価する目的で実施。

(4) 先進校視察（平成29・30年。いずれも9月中旬から）

AL研究員が県外先進校を視察。

(5) 公開授業（平成29年11月14日〔火〕、平成30年11月13日〔火〕）

AL研究員による公開授業と授業研究を実施。平成30年度は授業に加えて研究発表を実施。

(6) 校内研修会（平成29年12月27日〔水〕、平成30年12月27日〔木〕）

講師は2年連続で茨城県立並木中等教育学校校長 中島博司氏。グループワーキングやペアワーキングを通し、AL指導について研鑽を積んだ。

*1 茨城県立並木中等教育学校校長 中島博司氏が考案したALの実施率を示す指数。たとえば、50分授でAL5分なら「AL10」、50分授業でAL10分なら「AL20」。

- (7) AL研究協議会（平成30年2月21日〔水〕、平成31年2月19日〔火〕本校会場）
県内AL研究指定校（鹿屋高校・大島高校・加治木高校）により実施。各校の研究実践報告をはじめ、(3)の採点結果分析報告や大学入学共通テストに関する情報提供、さらに高校教育課担当者からの指導助言があった。

3 本年度の実践研究のポイント

(1) ALで身に付きつつあるものとは

^{*2}
平成30年度の実践研究のまとめにおいて、本校ではALを取り入れたことにより、「進んで授業に参加する生徒」「課題に対して自ら考えようとする生徒」「相手に自分の考えを論理的に伝えようとする生徒」が増つつあることが分かった。

この調査結果をもとに、ALで身に付きつつあると考えられるものを次のようにまとめた。

【ALで身に付きつつあるもの】

- 1 進んで学習に取り組もうとする態度
- 2 課題に対して自ら考える力
- 3 自分の考えを論理的に表現する力

(2) 本年度の課題

(1)を踏まえた上で、能動的に思考し、論理的に表現しようとする生徒の育成を目指し、本年度の研究課題を次のとおり設定した。

【本年度の課題】

一人ひとりが学習に主体的に取り組み、既存の知識を組み合わせながら、限られた時間の中で学習課題に対し最適解を考え、論理的に表現する力を高めるために、ALをどう活用すればよいか。

(3) 課題に取り組む上での留意点

課題に取り組むにあたっては、次の3点に留意するよう共通理解した。

ア 思考が活性化しているかどうかを重視する。

たとえ授業の中で生徒同士の対話の場面が設定されていなくても、テキストとの対話や自己内対話など、多様な対象との対話により、生徒が知識を相互に関連づけて能動的

*2 「アクティブ・ラーニングに関する本年度の取組と次年度に向けた課題」（平成30年度鹿児島県立加治木高等学校研究紀要）

に思考する場面があれば、すべてALであると捉えることとした。

イ 個→相互→個のサイクルを大切にする。

「テキストを読み取ったりじっくり考えたりするための時間」→「思考を深化させるための対話の時間」→「考えたことをまとめ、外化する時間」といった「個→相互→個」のサイクルに従って授業を展開することとした。

ウ 考えたことを外化する場を設定する。

自らの考えを深め広げることや論理的表現力を高めることをねらいとして、授業の終盤には、各自の考えを発表させたり、文章化させる場を設定することとした。

4 校内組織

本年度のAL研究員と指導法改善(AL)委員はそれぞれ次のとおりである。

前者は本校のAL実践の中心的存在として、県外先進校視察を行ったり各種研修会に参加したりするとともに、公開授業でALを活用した授業を提案する。後者は主に校内研修や研究公開等の企画や運営に携わる。

AL
研
究
員

- ・宮内裕平教諭
- ・濱田雄志教諭
- ・小川泰史教諭
- ・永田大樹教諭
- ・岩川康彦教諭

(指
導
法
改
善
委
員)

- ・戸高聡子教諭
- ・石井孝芳教諭 (チーフ)
- ・坂元勇夫教諭
- ・山下 覚教諭
- ・細瀧茂喜教諭

5 本年度の実践研究の概要

次に、本年度の実践研究の概要について報告する。昨年度と内容が同一のものについては、実施日のみ記載した。

(1) AL目標値の設定

前年度に引き続き、当初面談において管理職が「AL指数」の目標値を確認。

(2) 「スクールタイマー」の増設

特別教室を含む全教室に「スクールタイマー」を増設。(4月当初)

(3) 高校総合学力調査(8月26日〔月〕)

今年度は経年比較をみるため、2年生を対象として実施した。

(4) 先進校視察(9月中旬から)

AL研究員が次のとおり県外先進校を視察。

宮内教諭（9／17〔火〕・18〔水〕）

広島大学附属福山中・高等学校，広島県立尾道北高等学校

濱田教諭（9／25〔水〕・26〔木〕）

神戸大学附属中等教育学校，私立高槻中・高等学校

小川教諭（9／26〔木〕・27〔金〕）

愛媛県立松山東高等学校，愛媛県立松山南高等学校

永田教諭（9／17〔火〕・18〔水〕）

広島県立広島中・高等学校，広島県立尾道北高等学校

岩川教諭（9／19〔木〕・20〔金〕）

福井県立敦賀高等学校，福井県立高志高等学校

なお，11月19日（火）に視察報告会を開催し，成果を全職員に還元した。

(5) 公開授業（11月12日〔火〕）

研究発表及びAL研究員による公開授業・授業研究を実施。

ア 研究発表

【テーマ】能動的思考に導くALの在り方：発表 石井孝芳教諭

イ 公開授業・授業研究

(ア) 国語

【分科会テーマ】主体的・対話的で深い学び

- ・本校職員以外の参加者11人（中学校2，高校8，行政1）
- ・指導助言者 高校教育課高校教育係 宮永 治 指導主事

(イ) 地歴・公民

【分科会テーマ】学力向上に繋がるALの実践

- ・本校職員以外の参加者10人（高校9，行政1）
- ・指導助言者 高校教育課高校教育係 永盛光国 指導主事

(ウ) 数 学

【分科会テーマ】学力向上に繋がる小中高連携

- ・本校職員以外の参加者10人（中学校2，高校7，行政1）
- ・指導助言者 高校教育課高校教育係 渡辺豊隆 指導主事

(エ) 理 科

【分科会テーマ】新教育課程における小中高連携

- ・本校職員以外の参加者8人（小学校2，高校5，行政1）

- ・指導助言者 県総合教育センター教科教育研修課高校教育研修係
森田忠和 係長

(オ) 外国語

【分科会テーマ】即興力を高めるA Lの実践

- ・本校職員以外の参加者8人（中学校2，高校5，行政1）
- ・指導助言者 高校教育課高校教育係 鶴田美里映 指導主事



公開授業（左：数学 右：地歴公民）

(6) 県内公開授業参観

県内高等学校のA L研究員の公開授業について、本校職員が次のとおり参観。

- ア 沖永良部高校（11月1日，数学）
- イ 鹿児島中央高校（11月14日，理科）
- ウ 鹿屋高校（11月18日，数学）
- エ 加治木工業高校（11月21日，英語〔4人〕）
- オ 鶴丸高校（11月22日，理科）
- カ 大島高校（12月18日，国語）

(7) 校内研修会（12月24日〔火〕）

キャリアコンサルタントの垂水菊美氏を講師に迎え、「グループワークの質向上研修」を実施した。「意見の対立を恐れない」「相手の主張を理解する」「自分と相手の意見の違いを確認し、意見の違いを乗り越えるために協同して問題解決に取り組む」などをテーマとして、グループワークのポイントを学んだ。



校内研修会の様子

(8) A L研究協議会（2月21日〔金〕）

6 本年度の実践状況

*3

令和元年9月に全校生徒及び全職員を対象としたアンケート調査を実施した（アンケートの調査内容は、生徒用は下のとおり。また職員用については10・11頁を参照）。以下、集計結果に基づき、本校のAL指導の現状について報告する。なお、職員アンケートについては昨年度との比較も記載した。

授業に関するアンケート（生徒用）

令和元年9月

授業内容をよりよいものにするために、生徒の皆さんにアンケートの協力をお願いします。ここでいう「授業」とは、特定の教科・科目を指すものではなく、学校で行われるすべての授業を言います。あまり深く考えず、最もそう思うものに○を付けてください。

1 あなたは何年生ですか。当てはまる記号に○を付けてください。

ア 1年生 イ 2年生 ウ 3年生

2 授業では、話し合いやペアワークなど、生徒同士で対話する時間が確保されていますか。

当てはまる記号一つに○を付けてください。

ア とても確保されている。 イ ある程度確保されている。
ウ あまり確保されていない。 エ ほとんど確保されていない。

3 授業では、進んで考えたり、深く考えたりするための時間が確保されていますか。当てはまる記号一つに○を付けてください。

ア とても確保されている。 イ ある程度確保されている。
ウ あまり確保されていない。 エ ほとんど確保されていない。

4 授業では、発表・スピーチ、あるいは書くことなど、考えたことを表現するための時間が確保されていますか。当てはまる記号一つに○を付けてください。

ア とても確保されている。 イ ある程度確保されている。
ウ あまり確保されていない。 エ ほとんど確保されていない。

5 現在、各教室に「スクールタイマー」が設置されています。授業で利用されていますか。当てはまる記号一つに○を付けてください。

ア とても利用されている。 イ ある程度利用されている。
ウ あまり利用されていない。 エ ほとんど利用されていない。

6 授業について、改善してほしいこと、新たに取り入れてほしいことを自由に書いてください。

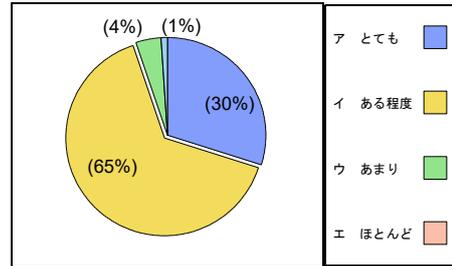
*3 職員アンケート……調査期間：令和元年8月21日～9月20日 対象者 54人 回収率100%
生徒アンケート……調査期間：令和元年9月 2日～9月 6日 対象者934人 回収率95.2%

(1) 生徒アンケートの全体集計結果

① 生徒同士で対話する時間(2の質問)

「ア」が30%、「イ」が65%と合計で90%を超え、「ウ」と「エ」を大きく上回った。

生徒同士で対話する時間

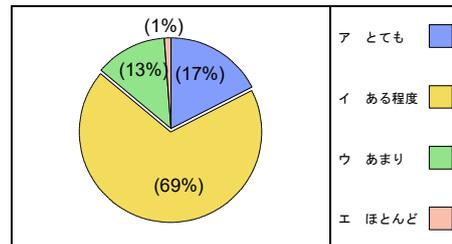


② 進んで考えたり深く考えたりする時間

(3の質問)

「ア」が17%、「イ」が69%と合計で86%を超え、「ウ」と「エ」を大きく上回った。

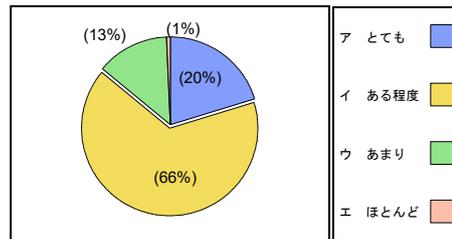
進んで考えたり深く考えたりする時間



③ 考えたことを表現する時間(4の質問)

「ア」が20%、「イ」が66%と合計で86%を超え、「ウ」と「エ」を大きく上回った。

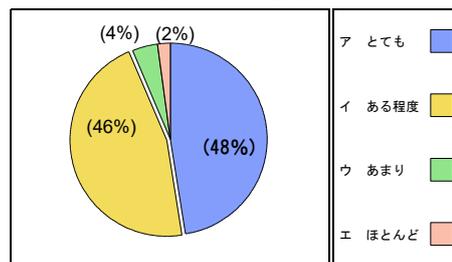
考えたことを表現する時間



④ スクールタイマーの利用(5の質問)

「ア」が48%、「イ」が46%と大半を占めた。

スクールタイマーの利用



⑤ 授業への要望(6の質問)

「授業について改善してほしいこと、新たに取り入れてほしいこと」について、自由記述で回答を求めた。

「話し合う(教え合う)時間がもう少しほしい」「考える時間を長くしてほしい」「グループ活動の時間を増やしてほしい」など、対話を取り入れた授業が増えることを望む回答が目立つ(8・9頁)。

6「授業について改善してほしいこと、新たに取り入れてほしいこと」 回答一覧(一部抜粋)

番号	学年	教科	内 容	ALに関すること
1	1	教科全般	進むペースが速いので、もう少しゆっくり進めてほしい。	
2	1	教科全般	周りの人と話し合う時間がほしいです。	○
3	1	教科全般	理解するのに考える時間がほとんどないので、もう少し考える時間を取り入れてほしい。	○
4	1	教科全般	分からなくて間違えた時に怒らないでほしいです。	
5	1	教科全般	クラスメイト同士で教え合う時間がほしい。	○
6	1	教科全般	考える時間がほしい。	○
7	1	教科全般	予習していたところを間違えていた時に怒ることを直してほしい。	
8	1	教科全般	黒板をたたくと大きな音がして驚いてしまうのでやめてほしいです。	
9	1	教科全般	もう少し考える時間がほしい。	○
10	1	教科全般	もう少しクラス全体との情報共有の時間がほしい。	○
11	1	教科全般	課題を減らしてほしい。苦手教科に打ち込む時間がない。	
12	1	教科全般	クラスの皆が分かりづらい問題や、難しいものには、もっと時間をかけてほしい。	
13	1	教科全般	日付で当てないでほしい。眠くならない授業をしてほしい。課題や予習が多すぎる。	
14	1	教科全般	考える時間をもう少し長くしてほしい。	○
15	1	教科全般	そもそもスクールタイマーとは何ですか。	○
16	1	教科全般	楽しい、面白い(FUNNYではありません)と感じる授業に限られている。	○
17	1	教科全般	教科書の順番どおりに授業が進まない時は、その日は教科書の何ページをするのか伝えてほしい。	
18	1	教科全般	挙手制の授業に答えづらいような雰囲気がある。	
19	1	教科全般	宿題が多いと自主学習の時間がない。	
20	2	教科全般	グループ活動の時間を増やしてほしい。ただ受け身の授業だと眠くなる。	○
21	2	教科全般	授業中静かになることが多いが、生徒たちは口に出さないだけで色々思っていることがあると思う。	
22	2	教科全般	話し合いがない。	○
23	2	教科全般	世間話程度でなく、無駄話でがっつり授業がつぶれることがある。	
24	2	教科全般	アクティブ・ラーニングは何のためにやっているのですか。また、どんな効果を期待しているのですか。	○
25	2	教科全般	難度の高い問題に対して、全員で考えたり、教え合ったりするような時間を取り入れてほしい。(特に理系科目)	○
26	2	教科全般	ペアワークではなく、グループワークを積極的に取り入れてほしい。	○

番号	学年	教科	内 容	ALに関すること
27	2	教科全般	「2人組を作ってください」はすぐ1人になるからあまり言わないでほしい。	○
28	2	教科全般	隣の人と話し合うではなく、歩き回っても可としてほしいです。	○
29	2	教科全般	実力演習などを解く時間を設定してほしい。	
30	2	教科全般	もっと面白い授業を設定してほしい。	○
31	2	教科全般	字をきれいに書いてほしい。人に見せる字じゃない先生がいる。	
32	2	教科全般	先生が話すだけの授業が多い気がします。理解しづらいし、寝る人も多いです。	○
33	2	教科全般	字をきれいに書いてほしい。	
34	2	教科全般	聴き取りやすいように、ゆっくりめに、はっきりしゃべってほしい。	
35	2	教科全般	チャイムがなっても授業を続けるのはやめてほしい。	
36	2	教科全般	眠い授業をしないでください。	○
37	2	教科全般	面白い授業をしてほしい。無駄話はいらない。	○
38	3	教科全般	板書が間違っていたからといって、先生がみんなの前で責めたり、ののしたりしないでほしいです。	
39	3	教科全般	先生によって授業の内容や質に差がありすぎる。	
40	3	教科全般	同じ教科でも教え方や添削の質が人によって変わるので、しっかり統一してほしい。	
41	3	教科全般	自主学習の時間をもっと設けてほしい。	○
42	3	教科全般	たばこを吸った後に来ないで。	
43	3	教科全般	きっちり時間内に終わらせてほしい。できない先生はいつもできない。	
44	3	教科全般	どうしてそうなるのかを考える時間がもう少しほしい。	○
45	3	教科全般	聞いているだけの授業だと眠くなってしまうので、グループ活動がほしい。	○

(2) 職員アンケートの集計結果

アクティブ・ラーニング（AL）についての職員用アンケート

令和元年 8 月 21 日

11月12日（火）に実施されるAL公開における研究発表に向け、先生方を対象に意識調査を実施します。忌憚のない回答をお願いします。9月20日（金）までに教頭席所定の袋にお入れください。なお、集計結果は、研究発表で公表する他、必要に応じて外部に公開します。

1 現在の授業担当学年は次のどれですか。当てはまる記号にすべて○を付けてください。

ア 1 学年 イ 2 学年 ウ 3 学年

2 ALを授業に取り入れていますか。当てはまる記号に一つ○をしてください。

ここで言うALとは、「生徒を能動的思考に導く学習活動」を指します。従って、テキストとの対話や自己内対話を含め、様々な対象との対話によって生徒が知識を関連づけて能動的に思考する活動が成立していれば、たとえ講義形式中心の授業であってもALとして捉えてください。

ア 積極的に取り入れている。 イ 必要に応じて取り入れている。

ウ あまり取り入っていない。 エ まったく取り入っていない。

2でアまたはイを選んだ方は3～9へ。2でウまたはエを選んだ方は10へお進みください。

3 ALを取り入れている授業時数の割合は、週当たりで考えた場合、おおむねどの程度ですか。当てはまる記号に一つ○をしてください。

ア 5%未満 イ 5%～10% ウ 10%～30%

エ 30%～50% オ 50%以上

4 50分間の授業当りの「AL指数」[※]はおおむねどの程度ですか。当てはまる記号に一つ○をしてください。

※ 茨城県立並木中等教育学校 中島博司校長が考案したALの実施率を示す指数。たとえば、50分授業で5分なら

「AL10」、50分授業でAL10分なら「AL20」。

ア AL5（2.5分）以下 イ AL10（5分） ウ AL20（10分）

エ AL30（15分） オ AL40（20分） カ AL50（25分）以上

5 現在取り入れているALは次のどれですか。当てはまる記号にいくつでも○をしてください。

ア 書く活動 イ 話し合い活動 ウ グループやペアでのワーキング

エ 話す活動（スピーチ・プレゼンテーションなど） オ 講義形式

カ 演習形式 キ その他（[具体的に] ）

- 6 能動的思考に導くために(あるいは深い思考に導くために), 日頃からどのような工夫を行っていますか。いくつでもお書きください(授業以外のことでも結構です)。

- 7 考えたことを可視化させるために, 日頃からどのような工夫を行っていますか。いくつでもお書きください(授業以外のことでも結構です)。

- 8 ALを取り入れたことによって, 昨年度以前に比べて生徒に何らかの変容があったらいくつでもお書きください。

- 9 ※ 「R80」を活用していますか。当てはまる記号に一つ○をしてください。

※茨城県立並木中等教育学校の中島博司校長が提唱しているALの手法。思考力・判断力・表現力, 論理力の育成を目的とし, ALの最後に生徒に授業を振り返らせ, 80字以内(2文, 文と文との間に接続詞を入れる)でまとめさせるもの。

- ア 主に授業で活用している。 イ 主に授業以外の活動(LHRなど)で活用している。
ウ 授業と授業以外の活動のどちらにも活用している。
エ 活用していない。
オ その他 ()

- 10 (2で, ウまたはエを選んだ方) ALを取り入れていない理由は何ですか。当てはまる記号にいくつでも○をしてください。

- ア ALを取り入れることに意味や必要性を感じないから。
イ ALの具体的な実践の方法が分からないから。
ウ 単元の内容がALに適さないから。
エ クラスの雰囲気(ALになじまないから)。
オ その他 ()

11 はすべての方がお答えください。

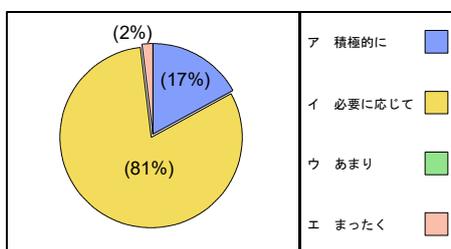
- 11 現在, 各クラスに「スクールタイマー」が設置されています。利用していますか。当てはまる記号に一つ○をしてください。

- ア よく利用している。 イ 時々利用している。
ウ 利用したいが, 利用すべき機会が今のところない。
エ 利用するつもりはない。

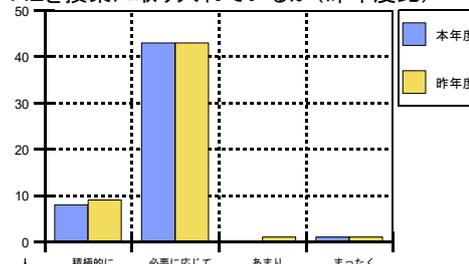
① ALの導入について（2の質問）

「ア」「イ」の合計が98%であった。昨年度と比べ、回答の分布に有意差はない。

ALを授業に取り入れているか



ALを授業に取り入れているか(昨年度比)



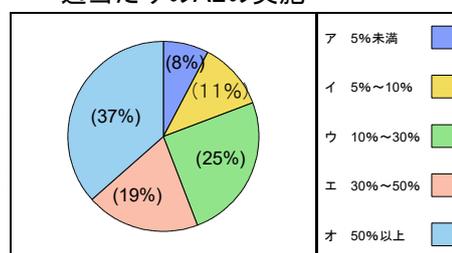
② 週当たりのALの実施について（3の質問）

ALを取り入れている授業時数の週当たりの割合を尋ねた。

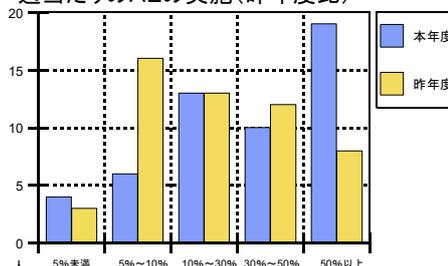
最も多かった回答が、「オ」で37%、次いで「ウ」の25%、「エ」の19%と続く。昨年度は、最も多かったものが「イ」で31%、以下「ウ」の25%、「エ」の23%であった。

なお、3-(3)で述べたとおり、本年度は、生徒が能動的に思考する活動が成立していればすべてALとして捉えているので、年度比較に当たっては、ALの概念が昨年度と同一ではないことに留意する必要がある。

週当たりのALの実施



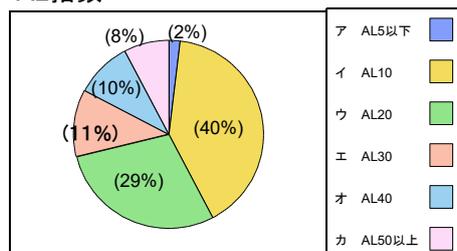
週当たりのALの実施(昨年度比)



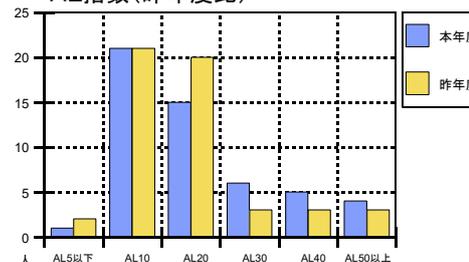
③ AL指数について（4の質問）

「イ」が40%と最も多く、次いで「ウ」20の29%と続く。「エ」～「カ」は合わせて29%である（昨年度、「エ」～「カ」は合わせて18%であった）。

AL指数



AL指数(昨年度比)

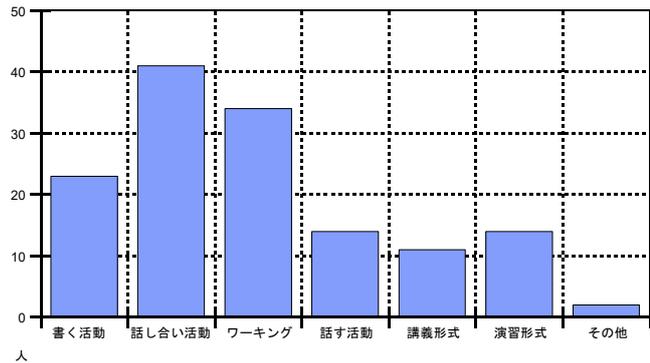


④ ALの内容について（5の質問）

現在取り入れているALについて、複数回答可という条件で尋ねた。「話し合い活動」が41件、次いでグループ（ペア）ワーキングが34件であった。

回答ののべ数は139件に上る。職員は授業で複数の学習活動を組み合わせていることが分かる。

取り入れているAL(複数回答)

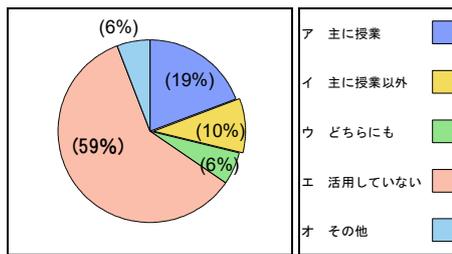


*4

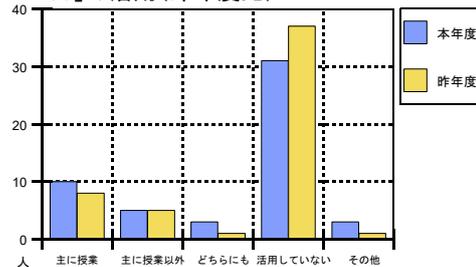
⑤ 「R80」の活用について（9の質問）

「ア」「イ」「ウ」, それに「オ」を合わせると40%を超える。昨年度は同一質問の回答の合計が14%であったことから、R80の活用が浸透しつつあることが分かる。

「R80」の活用



「R80」の活用(昨年度比)

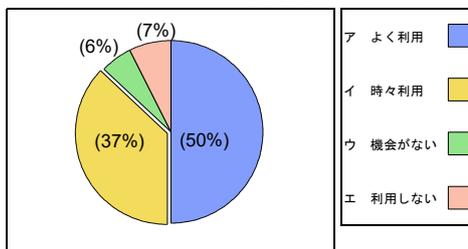


⑥ 「スクールタイマー」の活用について（11の質問）

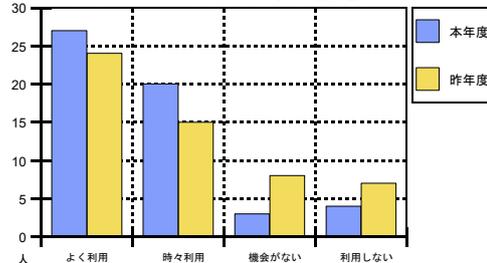
「ア」「イ」の合計が87%であった。大半の職員が利用していることになる。

昨年度は同一質問の回答の合計が72%であったことから、本校においてスクールタイマーはかなり定着してきたことが分かる。

スクールタイマーの利用



スクールタイマーの利用(昨年度比)



*4 茨城県立並木中等教育学校校長 中島博司氏が提唱しているALの手法。思考力・判断力・表現力、論理力の育成を目的とし、ALの最後に生徒に授業を振り返らせ、80字以内（2文、文と文との間に接続詞を入れる）でまとめさせるもの。

7 AL指導の工夫

3-(2)で示した「本年度の課題」の解決に向け、実際の指導の状況を把握するために、職員に対し、日頃行っているAL指導に関する工夫について質問した。特に、「考えさせるための工夫」と「表現させるための工夫」の2点にポイントを絞って質問した(11頁 質問6・7)。

(1) 考えさせるための工夫について

質問6「能動的思考に導くために(あるいは深い思考に導くために)、日頃からどのような工夫を行っていますか」を設定し、自由記述形式で回答を求めた。なお、集約した回答については、その内容に従って次の8項目に分類した。

※分類した項目

ア 書く・話す・調べる	イ 発問の仕方	ウ 理由・根拠を問う
エ 考える時間の確保	オ 基礎・基本の重視	カ 雰囲気づくり
キ 振り返り活動	ク その他	

実際の回答は以下のとおりである(一部抜粋、文末表現は常体に統一した。)

ア 【書く・話す・調べる】

- ・ R80のように要約をさせている。
- ・ 書く活動の前に質疑応答によって話す活動を必ず行う。
- ・ ペアワーク, グループワークを入れる。
- ・ 講義形式であっても, 必ず近隣の生徒同士で話し合う活動を取り入れている。
- ・ 課題を与えて調べさせたり, 考えさせたり, 自分で活動させている。

イ 【発問】

- ・ 毎時間, オープン・クエスチョンを用意している。
- ・ 授業の導入部分での動機付けのために発問の工夫(クイズ形式)をしている。
- ・ 思考材料の提供, 確認をした後, それらを活用して考える発問などの工夫。
- ・ 授業の中で, どの場面で, どのような「問い」を設けるか。常に考えている。
- ・ 発問の難易度を易→難と段階的に設定することによって, 生徒が思考しやすくなるよう導く。
- ・ 基本的な指導をした後, それに関する応用的な発問をしている。
- ・ 答えがいくつもあり得る発問をする。

ウ 【理由・根拠を問う】

- ・ 発言に対して「なぜ」「どうして」と聞くようにしている。
- ・ 知識を使って「なぜか」を考えさせている。

- ・ なぜそうなるのか説明させる。
- ・ 根拠を明らかにする説明をしたり，させたりする。
- ・ 「なぜそうなるのか」「理由は」の発問を多くすることを心がけている。
- ・ 歴史的事象の背景や理由を生徒に発問し，考察させている。
- ・ 出題の意図の説明をしている。

エ 【時間の確保】

- ・ 生徒が思考する時間を与える。
- ・ 時間をかけて自分の力で考えさせる。
- ・ ICTの活用で可能な限り思考する時間を設ける。
- ・ あえて答えを出さない（説明しない）場面を設定している。

オ 【基礎・基本】

- ・ 観察力や気付く力の土台は，「みる力」である教科なので，基礎基本の知識や演習を各題材で扱い，それをもとに構想を深めさせている。
- ・ データの比較，グラフの見方…など基本的な技能の練習・定着。
- ・ 説明するための語彙が不足しているので，簡単なものから難易度の高いものへ段階的に考えさせるようにしている。
- ・ 知識がなければ考えることができないので，作品や物事の背景を教えてから考えさせたり，資料を組み合わせさせて考えさせたりする。
- ・ 2人組で单元内の用語テストを行う（問題を出し合う）ことをしています。

カ 【雰囲気づくり】

- ・ 多くの人と交流しやすいように，グループ替えをまめにしている。
- ・ 生徒の発言を否定せず，必ず受け入れて思考発展のヒントになるように教師側が工夫する。
- ・ 能動的思考に導けるような雰囲気作りや声かけを日頃から行っている。
- ・ 自己肯定感，自己有用感の醸成に日頃から努めて，他者との対話がしやすい環境作りに努める。
- ・ 体育ではグループごとにチームで活動する時間を設けている。部活動でも，効率よく活動できるように，準備・片付け，集団としての行動を考えさせている。

キ 【振り返り活動】

- ・ 既習内容の振り返り等は問いかけの形で行う。
- ・ 他の生徒と意見を交換し，その結果自分の考えがどう変化したかを振り返らせる。
- ・ 学習した内容の定着のため，以前学習した内容を生徒相互で確認させ，忘れていた場

合には生徒相互で教え合わせる。

- ・ 前時の復習部分で、生徒の意見を数名分紹介する。
- ・ 1人での対話の状況を積極的に拾い上げる方法を検討する。

ク 【その他の工夫】

- ・ 自分と他者の考えの差について互いに検討し合い、よりよい考えや解答を導く機会を設ける。
- ・ (数学の) 立体は自分で紙で作成させ、それを見ながら問題に取り組ませている。
- ・ 考えをシェアすることにとどめる場合と、対立止揚させる場合との両面を大切にしている。
- ・ 現在起こっている諸問題と関連させながら考えさせるようにしている。
- ・ 解答を導くよう細かくヒントを与える。
- ・ 手取り足取りは教えないようにしている。
- ・ すぐに正解だと言わない。

(2) 表現させるための工夫について

質問7「考えたことを可視化させるために、日頃からどのような工夫を行っていますか」を設定し、自由記述形式で回答を求めた。集約した回答については、内容に従って次の3項目に分類した。

※分類した項目	ア 文章・作図	イ 発表・説明	ウ その他
---------	---------	---------	-------

実際の回答は以下のとおりである。

ア 【文章・作図】

- ・ R80の活用→授業後に各クラスごとに被服室に展示したところ、休み時間に読んでいる生徒がいる。
- ・ R80の定形表現をさせるレポート型課題を作成している。
- ・ 100字で覚えたことを書かせる。
- ・ グループ活動後に板書させる。
- ・ トピックを英作文で書かせて提出させている。
- ・ ライティング活動（自分の考えを書く。他者の話したことや書いたことに対して感想を書く）を取り入れる。
- ・ 図で表現させ、思考の一助としている。
- ・ グラフ、図、モデルを極力書かせようとしている。
- ・ 作図で表すよう指導している。

- ・ 作図や立式について、生徒自身が行う時間を設定する。
- ・ 思考をチャート形式で書くようにしている。

イ【発表・説明】

- ・ B4版の用紙に調べたことをまとめ、グループで発表させてみた。
- ・ 近くの生徒同士で現象や理論について説明し合う時間を取り入れ、時間があるときには書いて説明させている。
- ・ 発表・プレゼンテーションを取り入れている。
- ・ KP法（かみしばいプレゼンテーション法）を用いる。

ウ【その他】

- ・ 自分の考え（答え）を消しゴムで消して鉛筆で訂正する生徒がかなり多いため、「思考の跡」を消さないよう指導している。
- ・ 自分一人が指名され板書するのに抵抗感がある生徒が多いようなので（間違えると恥ずかしいらしい）、グループワークで、ホワイトボードに求めさせてから全員に示すように指示した。
- ・ 行事などの振り返りを行っている。具体的に記入し、客観的に見つめ直すように指導している。
- ・ 振り返りシートを毎時間、最後の5分で記入させている。
- ・ 振り返りの文章を書かせている。
- ・ 活動した後にフィードバックして見直しをさせる。
- ・ 科目の特性上、ロジックを守り論を展開（命題、反駁を含む）する上で構成メモを必ず書かせている。
- ・ まずは考える時間を多くするため、教科書の例題はノートをとらせない。必要なことのみ教科書に書き込ませる。
- ・ 書いたことをお互いに音読させたり、評価させたりしている。

8 総括

3年間をとおしたALに関する実践研究の成果を、次の5点にまとめたい。

- (1) スクールタイマーを全教室に設置するなど、AL指導を行うための条件を整備することができた。
- (2) 県外先進校視察、県内公開授業参観、校内研修会などをとおして、AL指導の在り方について研修を深めることができた。

- (3) 実践研究の方針や課題を明確化し、AL指導の進め方について全職員で共通理解を図ることができた。
- (4) アンケート調査結果分析により、本校におけるAL指導の現状を明らかにすることができ、さらに生徒の変容や身に付く学力等を可視化することができた。
- (5) アンケート調査結果分析により、「考えさせるため」あるいは「表現させるため」に本校職員が取り入れているAL指導の工夫について明らかにすることができた。

特に30年度においては、校内におけるAL指導の現状を明らかにするとともに、ALによる生徒の変容やALで身に付くものを可視化することができた。また本年度は、職員アンケートに加え全校生徒対象のアンケートを行うことで、AL指導の現状をより客観的に捉えることができた。さらに、本校におけるAL指導の工夫を分類・整理することができた。

これらの実績は、来年度以降、ALの実践研究を推進するための基盤となり得るものである。

9 今後の課題

能動的に思考し、論理的に表現しようとする生徒の育成に向け、来年度以降も以下の2点に力を入れたい。

(1) ALの実践状況を明らかにする。

AL指導の改善を行うためには、まず指導の状況を客観的に把握することが必要である。職員及び生徒へのアンケートを定期的実施し、調査結果を全職員で共有することにより、学力向上に結びつくAL指導の在り方を模索していきたい。

(2) ALの指導法を蓄積する。

本年度は本校職員のAL指導の実際を収集し整理した。今後も継続して各教科の指導法を蓄積していくことで、加治木高校独自のAL指導マニュアル、いわゆる「加治木スタンダード」を構築したい。

10 終わりに

3年間をとおり、様々な観点からALに関する実践研究を深めることができた。次年度以降も「進んで学習に取り組もうとする態度」「課題に対して自ら考える力」「自分の考えを論理的に表現する力」を、AL指導をとおしてさらに高めていきたい。

最後に、これまでの実践研究に対し貴重な指導助言をいただいた県教育委員会をはじめ、本校にALの種を蒔いてくださった茨城県立並木中等教育学校 中島博司校長先生ほか、多大な協力を賜った関係諸機関に心から感謝する。